

古文書倶楽部

公文書館講座古文書解読コース・初級編

「秋田の関ヶ原」を読む

慶長五年（一六〇〇）九月十五日、日本史上最も有名な戦いがありました。天下分け目の「関ヶ原の戦い」です。この戦いに勝利することで、徳川家康が江戸に幕府を開く直接的な契機となった戦いです。

この戦いの帰趨がこのあとの時代を規定したことは事実ですが、このとき「関ヶ原」以外にも様々な戦いが全国で起こっていました。

九州では、黒田官兵衛が領土拡大のために独自の動きをし、東北でも上杉景勝と最上義光の戦いが起こります（大河ドラマでも描かれた、直江兼続による長谷堂城の戦いです）。

特に東北では、この戦いに連動して、伊達政宗が動きを活発化し、さらに最上氏の動きに關連して、秋田地域でも秋田氏や由利衆が戦いに参加しようとしています。

このような東北における「関ヶ原の戦い」に連動した動きを総称して、「慶長五年東北合戦」や「北の関ヶ原」と呼んでいます。

それではこれらに絡んで、秋田地域ではどのような動きがあったのでしょうか。この時代に関係する資料は、公文書館では『秋

【発行】

秋田県公文書館
2012.5
第47号

田藩家蔵文書」があります。その中に次のような資料があります。

現在の秋田市以北を支配していた秋田最大の戦国大名である秋田実季が、山屋村の孫左衛門に対して、大森城の攻防戦に参加したことを証明するために発行した黒印状です。



「秋田実季黒印状」

本文に「大森陣遣相つとめ候也」とあり、端書と思われる部分に「仙北大森合戦二出候時勤候書付也」と書かれています。日付は「慶長五年十月廿四日」です。通常は書状には年号が書かれません。黒印状などの印判状には、後世の証拠として機能するように、略した年号が書かれる場合があります。この文書は慶長五年、まさに関ヶ原の年のものです。

大森城はこの段階で小野寺氏の支配と考えられるので、最上氏と連携する動きを見せていた秋田氏と、最上氏に対抗していた小野寺氏との

間、大森城をめぐる戦いが「関ヶ原」の一ヶ月後に起こっていたことがわかります。

これを「秋田の関ヶ原」と呼んでおきます。以上は、平成二二年度の企画展「戦国時代の秋田」においても、一コーナーとして取り上げた内容でした。

はじめ秋田氏とともに最上氏に従う形であった小野寺氏が、関ヶ原の決着後に秋田県内で秋田氏の戦鬪を起こした本当の理由は、未だに解明されていません。

今回は公文書館講座の解読コースの初級編（七月二一日、二八日、八月四日の三回）で、慶長五年に出された三人の書状（最上義光書状・直江兼続書状・小野寺義道書状）を取り上げ、「秋田の関ヶ原」の実像に迫ります。

最後に、「秋田の関ヶ原」のその後について触れておきます。

慶長七年（一六〇二）、常陸の大大名であった佐竹義宣が秋田に転封され、秋田実季は代わりに常陸に配置され、さらに福島・三春に移り明治を迎えます。角館の戸沢氏は、常陸を経由して山形の新庄へ戻ってきます。反徳川の陣営で動いた小野寺義道は改易となり、石見へ流罪となります（家臣の一部は秋田藩士となる）。由利衆は最上義光の支配に入った後、最上氏改易に伴い霧散します（一部秋田藩士となる）。六郷の領主の六郷氏は、常陸転封を経て大名となり、本荘の領主として秋田に戻ってくるようになります。

「秋田の関ヶ原」は佐竹氏だけでなく、秋田の戦国大名にも様々な未来を開いていったのでした。

【佐藤 隆】

古文書こぼればなし

佐竹義重の逆修善根

—高野山の「重文」指定佐竹家霊屋—

去る四月三日から六日にかけて、高野山と吉野、それに伊賀上野を巡る旅に参加し、いささか上方の風物に触れてきました。

高野山は、平成三年に訪れて以来の二十年振りです。標高九百メートルの山頂にある町は、独特な靈気に包まれ、荘厳な雰囲気に充ち、山全体が曼陀羅の世界だといわれています。

奥の院に向かう一の橋の近くに、佐竹家が代々宿坊としてきた、清浄心院という寺院があります。弘法大師の草創で、本尊は二十日大師といひ、大師入定前日の姿を刻んだものとして、古くから信仰を集めているという由緒ある寺院です。

(2012年5月)
一の橋を渡ると間もなく、清浄心院の管理となつている、佐竹家の廟所があります。廟所には五輪塔が建ち並び、義重の逆修のための建立という御霊屋があります。これは、昭和四十年(一九六五)五月二十九日に国重要文化財に指定されています。

戦国末期の熾烈な戦いを生き抜いた、佐竹義宣と父義重は、戦いによって失われた多くの命の供養と、自身の心の平穩のためか、神社仏閣の保護に努め、新しい寺院を建立するなど、信仰に心を注いだといひます。

義重は、義宣が常陸国(茨城県)を統一して

水戸に居城を移してからも、太田城に住み北城様と呼ばれ、義宣を支えるとともに寺社の加護にも努めていたようです。

義重は、死後の冥福を祈るため(逆修)、慶長四年(一五九九)九月七日、太田(常陸太田市)の福寿院に四十九院を建立したといひます。

義重の家老で普請代官の田中隆定に、福寿院の僧快尊が送った書状から推測するに、豪華絢爛の建築であったことが偲ばれます。

更にこの年、慶長四年十月十五日に前記の逆修御霊屋を建立し、父源真公(義昭)と母宮山妙安(宮山玉芳)と義重自身の石塔を造立して逆修と追善をしています。後年寛永十二年(一六三五)と十三年には、義重夫人と義宣継室の石塔が追善建立されています(国典類抄)。この五基は宝篋印塔で、これも同時期に「重文」になっています。御霊屋正面の柱左右に造立



御霊屋内部の宝篋印塔

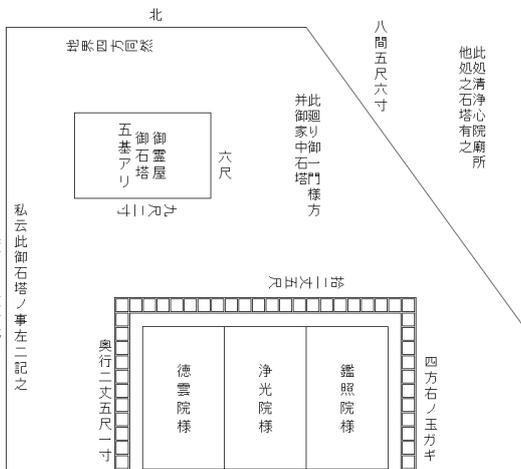


佐竹家御霊屋の全景

者義重と造立年月日が刻銘されていて、造立年代が明らかかな点でも貴重で、特徴は木造の卒塔婆の角材を正面、側面、背面と四十本建て並べ、壁にしている点で極めて類例が少ないことが重文指定の理由とのこと(高野山霊宝館ホームページ)。

御霊屋は、普段は施錠されているので内部は拝観できないが、平成三年に清浄心院を訪問した折には内部などを拝観し、写真を撮ることができました。掲載の写真はその時のものです。但し御霊屋全景の写真は、今回撮影したものです。寒い高野山でしたが、宿坊の福智院はホテルなみの、寺院とは思われない宿坊で、般若湯と精進料理に舌鼓をうち、快適な一夜を過ごすことができました。朝は勤行に参加し、読経と住職の説教を聴聞し、心が洗われた思いで山を後にしました。九拜。

【嗟峨稔雄】



「国典類抄 前篇凶部十三」

(AS209-169-14) より作成